

夢想家抱石

久松真一のポストモダン世界と西洋における批判

ジェフ・ショア

「精神の自由は、歴史が外から課せられたものと感じることをやめ、むしろ精神にとって重要な内的できごととして捉えはじめた者にのみ属する。」

ベルジャエフ (1874~1948)

禅学研究会での発表の機会を与えていただきましたことを大変光栄に思いますとともに、心から感謝いたしております。

この25年のあいだ、私はほんとうの「禅学」とは何かということを理解しようとしてまいりました。「禅」と「学」が結びついたこの禅学というものはいったいどういうものであるべきか、ということであります。現在もこの問いに取り組んでいます。私自身、禅僧でもなければ専門の学者でもないので、正直なところ「禅」についても、また「学」についてもお話しする資格などないと思うのですけれども、何か話せという仰せに従って出てまいったような次第であります。今回は皆さんといろいろ議論し、また学ばせていただく貴重な機会であると存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

久松真一〔居士名抱石〕は、西田幾多郎に師事し、独自の禅思想を打ち立てた思想家であります。居士として池上湘山老師のほか他の老師の下で修行し、その後FAS協会を創立・指導するとともに、茶人・書家としても活躍しましたが、18年前に亡くなりました。

1997年11月15日、花園大学で行われた第六十八回禅学研究会学術大会での発表より。なお、久松ポストモダン哲学への批判については、1998年出版予定の【FAS論集】所収の常盤義伸氏による反批判を参照。

Is Hisamatsu's Post-Modern World "Utopian"?

Jeff Shore

Freedom of the spirit belongs only to him who no longer feels history as an exterior imposition, and who begins to apprehend it as an interior event of spiritual significance.

— Berdyaev (1874-1948)

It is an honor to speak before this gathering of the Society for Zen Studies.

For twenty-five years now I've sought to understand what is true "Zen Studies"— what that combination of words really should mean. I'm still struggling with that question. Neither a Zen monk nor a real scholar as such, I frankly do not consider myself qualified to speak about either. In spite of my own reservations though, I have been asked to speak. I consider it a precious opportunity to discuss with and learn from the audience.

Shin'ichi Hisamatsu was a student of Kitarô Nishida and a Zen thinker in his own right; he practiced Zen as a layman under Shôzan Ikegami Rôshi and others. Later, he was the inspiration behind the FAS Society, and was active as a tea master and calligrapher. He passed away eighteen years ago.

This is a revised version of a lecture, given in Japanese, for the 68th Annual Conference on Zen Studies, held at Hanazono University, November 15, 1997.

近年、欧米では久松の思想と実践に対する関心が高まってきています。久松の著作の翻訳や関連記事を紹介する英文の雑誌が発行され、内容も充実してきておりますし、オランダで開催されているFAS接心とセミナーの集いには多くの人々が参加し、今年の夏にはその4回目が計画されています。また、FAS協会の「人類の誓い」は、世界各地の数多くの禅グループで唱えられるようになりました。

久松およびFAS協会の思想と修行に欧米人が魅かれる理由としていくつかの点が挙げられますが、まず、久松が伝統的な僧堂での禅に対する批判の一環として、普遍的に適用できる修行の方法を強調したことがあります。具体的には、現在行われている公案体系に固執しない、基本的公案というものを提唱しています。もうひとつの点は、形式的、権威主義的な参禅あるいは独参に代わる相互参究です。さらに、仏教の専門語を使わずに人間の「理想」を現代的な表現にまとめた「人類の誓い」に対しても関心が寄せられています。

しかし、久松は晩年になると、こうしたFASの基本的な考え方をさらに進めまして、「自分は『ポストモダニスト』である」と宣言し、「ポストモダン世界」、「ポストモダン思想」ということを提唱するようになります。さきほど申しましたように、世界的に久松およびFASについての評価が高まる一方、このポストモダン思想についてはしばしば批判され、あるいはまったく無視されるという状態が続いております。これはどうしてでしょうか。そういった批判にはどのような価値、あるいは限界があるのでしょうか。

ごくかいつまんで申しますと、久松のポストモダン思想に対する欧米からの批判は四点にまとめることができます。第一に、具体性を欠いている、第二に、エリート主義的である、三番目に、完全主義的ユートピア的理想主義であり、きわめて非現実的であり、はじめからほとんどの外れとなるはずの

Interest in his thought and practice has flourished recently in the West: a growing English-language journal publishes translations of and commentaries on his writings; FAS-style retreat-seminars in Holland have been well attended, and the fourth annual one is planned for this summer; many Zen groups around the world now recite the FAS Society's "Vow of Humankind."

Some of the ideas and practices that have drawn Westerners to Hisamatsu and his FAS Society include: Hisamatsu's stress on a universally-applicable practice combined with his criticism of traditional monastic Zen, specifically the fundamental koan rather than adherence to the present koan system, and mutual inquiry rather than formal and authoritarian *sanzen-dokusan*; also of interest is the "Vow of Humankind," a contemporary expression, free of Buddhist jargon, of the human "ideal."

Toward the end of his life, however, Hisamatsu labelled himself a "Postmodernist," and championed what he called the "Postmodern World" and "Postmodern Thought." While there is, as just mentioned, a growing appreciation of Hisamatsu and FAS worldwide, his postmodern thought, on the other hand, has been repeatedly criticized, or simply ignored. Why? What are the value, and limits, of these criticisms?

Very briefly, Hisamatsu's postmodern thought has been criticized by Westerners because it is 1) lacking in concreteness, 2) elitist, 3) a perfectionistic utopianism, extremely unrealistic, and thus

ものである、そして第四の点として、〔国家・社会の〕転覆をねらう危険思想である、と、このような批判がなされています。つまり、よくて「素朴なユートピア的理想論」、悪く言えば危険思想、というわけであります。まずはじめに、こうした批判を少し詳しく見ていきたいと思えます。

1) 久松のポストモダン思想は具体性を欠くという批判：

「残念ながら、久松は人類がいかにして国家を超えて世界システムに移るのか、世界システムをどのように組織するか、地域紛争をいかにして仲裁するかについて論を展開していない。」

これはつまり、「いかにして人類がそうしたシステムを現実に確立できるのか」を示していないということです。久松はポストモダン・システムの具体的な点について言っていないと言うのです。この学者はこの本の中で「人種差別、性差別、幼児虐待、環境汚染、資源枯渇、核戦争の脅威」の問題に触れています。

2) エリート主義的である：

「ポストモダン世界の創造について、久松は事実上透徹した禅的自覚が必要と言っているように思われる。在家に対して新しい禅修行の形を示してはいるが、これも結局は一握りのエリート、覚者のための倫理に終るのではないか。」

3) きわめて非現実的である：別の学者は久松が言う国家の否定、主権の全人類への移管ということの可能性を疑問視し「どのような現実的な基礎に立って、その実現を予測することができるのか」と言っています。さらに、別の学者も同じような考えを述べています。

doomed to virtual irrelevancy, 4) subversive — even dangerous. In a word, at best naively utopian, at worst downright dangerous. Let's look at these criticisms in a little more detail.

1) Hisamatsu's postmodern world lacks concreteness :

Unfortunately, Hisamatsu does not lay out how humanity can move beyond nation-states to a world system, how the world's system might be organized, or how regional disputes are to be arbitrated.⁽¹⁾

In brief, Hisamatsu has not shown "how might humanity actually establish that system"; Hisamatsu did not fill out the specifics in his postmodern system: the problems of "racism, sexism, child abuse, pollution, resource depletion, the threat of nuclear war" are mentioned.⁽²⁾

2) It is elitist :

With regard to the creation of a 'postmodern' world he seems to be saying, in effect, that.... 'one must have a thoroughly vivid Zen realization.' Although Hisamatsu provides a new form of Zen practice for the laity, does he not end up offering another ethic for the elite, for the awakened few?⁽³⁾

3) It is extremely unrealistic : Questioning the possibility of

「[久松]の思考はきわめて非現実的である、というのは今日の世界の現状を見れば、国家がその多くの欠陥にもかかわらず、今後しばらくの間存続することは疑いえないからだ。」

完全主義的ユートピア的理想論である：

「トランスナショナルの理想が提示されているが、国際社会の組織や協力の、より高尚でない形態が持つ効果がまったく拒否されていることを考え合わせれば、これは最もセンチメンタルな部類の完全主義的ユートピア的理想論である。」

はじめからほとんどの外れとなるはずのものである：

「国家の否定が必須条件として主張される場合、久松が提示するような禅の歴史への関わりは、社会や政治のさまざまな切迫した難問に対してははじめからほとんどの外れときまったようなものである。」

4) 国家社会の転覆をねらっている：

「人間のつくる組織はいずれもそれ自身を維持しようとするものであるから、F A Sは現在あるような社会を完全に破壊して、新しいポストモダン社会の構築を目指しているように思われる。これは転覆思想ではないか。」

危険思想であるという点については：

Hisamatsu's negation of the nation-state and transference of sovereignty to all humankind, another scholar argues, "On what realistic foundation can he assume its actualization?"⁽⁴⁾ A third scholar echoes a similar sentiment:

His thinking is extremely unrealistic because even a cursory glance at today's world indicates that the [nation-] state, for all its manifold faults, will undoubtedly be around for some time to come.⁽⁵⁾

That it is a perfectionistic utopianism :

The setting forth of the trans-national ideal, taken in conjunction with the total repudiation of the efficacy of less 'exalted' forms of international social organization and cooperation, reveals a perfectionistic utopianism of the most sentimental type.⁽⁶⁾

That it is doomed to virtual irrelevancy :

If the negation of the nation-state is insisted upon as a *sine qua non*, the Zen commitment to history as announced by Hisamatsu seems doomed to virtual irrelevancy as regards the pressing perplexities of social and political life.⁽⁷⁾

「久松の思想は危険であると思う。仏教者（や他の人々）にとって必要なことはただひとつ、国家を超えた世界が不可避であることに覚めることだ、というのだから。しかし、国家の死が起こらない場合は（実際ほとんど起こりそうにないのだが）、どうなるのか。」

これらの批判をした4人の欧米の方々はみな私も面識があり尊敬する学者で、禅の修行に真剣に取り組んでおり、あるいは久松やFASについて高く評価している人たちです。さらに、この4人は久松のポストモダン思想を詳しく取り上げた方々ですが、同じような批判はこの4人に限ったことではなく、ほとんどの欧米人が同じ態度を示しています。このことが、いま説明したような批判を検討することが大事だと私が考えるひとつの理由なのです。

さて、こうした批判はあまりにも厳しすぎるのではないかと思われる方もあろうかと思えます。しかし実はむしろまだまだ不十分なのであります。不十分とはどういうことか、こうした批判を検討しながら、ご説明したいと思えます。

まず第一に、久松は、場合によって具体的な問題を否定したり、矮小化しているように見えますが、実はそういうつもりはないということです。むしろ、久松が私たちに要求していることは、そうした問題をまったく新しい、根本的に「主体的な」しかたで捉えることなのです。批判する人たちにはこの肝心の点が十分に理解されていないと思えます。例えば、久松は「現実の社会」の争い、「ラディカルな社会変革」の必要について聞かれ、次のように答えています。

4) That it is subversive :

Since all human institutions seek to maintain themselves, it seems that FAS seeks the total destruction of society as it exists today, in the hope that the new postmodern society will be established. Is this not subversion?⁽⁸⁾

Finally, that it is dangerous :

I find his thinking 'dangerous' because it suggests that the only thing necessary for Buddhists (and others) to do is 'awake' to the inevitability of a supra-national world. Yet, what happens (as is most likely) if the death of the nation-state does not occur?⁽⁹⁾

These criticisms come from four Western scholars, all of whom I know and respect, and all of whom are also committed to Zen practice and otherwise appreciate Hisamatsu and the FAS Society. Further, although they are the ones who have dealt with Hisamatsu's post-modern thought in most detail, such criticisms are not limited to these four scholars; this same attitude prevails almost universally among Westerners. This is one reason why I think it important to examine these criticisms.

Some may consider the above critiques too harsh. On the contrary, they *do not go far enough*. Let us look at them once again to see what I mean.

現実の問題に即して出されてくる疑問ですね。ラディカルのように、ラディカルではないです。私どものはそうじゃなしに、もっともとから「一」であるところから出てきているのです。(中略) そういう根本の問題というものに徹しないから、そういう疑問点が残ってくるんであって、根本の問題に徹してきたら、それは自らなくなっていくと…⁽¹⁾

ここで重要なのは、久松は単純に具体的な問題を否定しているわけではなく、ユートピア的な理想から、あるいはそうした理想について語っているのではないということです。逆に、久松は「根本の問題」の中心つまり台風の目の中にいるのです。また他のところでは「人間の内面の要求」と言っています。⁽²⁾

第2点の久松のポストモダン世界はひとにぎりのエリートだけのためのものだという批判についても同じことが言えます。そうした覚めた自覚の真の根本は、単なる覚める個人なのではなく、久松いわく「あらゆる人間の本来の自覚」⁽³⁾なのですから、これほどエリート主義に遠いものはありません。この「あらゆる人間の本来の自覚」というところに、FASのF(つまり Formless Self 形無き自己に目覚める)とA (All Humankind 全人類の立場に立つ)とが結びつくのです。

次に、久松のポストモダン世界が非現実的、ユートピア的であり、的外れであるという批判についてはどうでしょうか。そのように受け取られる面があることはたしかですが、久松はポストモダン革命について語りつつ、次のような課題を突きつけているのです。「そんなことはいつ起こるか、というような頭は切り替えてほしい。(笑) やろうと思えば一瞬にしてできる。それが歴史的時間、創造的時間というものなんです。」⁽⁴⁾

First of all, Hisamatsu does not mean to deny or belittle the concrete issues, although it does sound that way at times. Rather, he challenges us to grasp them in a whole new, fundamentally "subjective" way. This central point has not been sufficiently understood by his critics. For example, when asked about the struggles of "actual societies" and the need for "radical reformation" of society, Hisamatsu responds:

That kind of question presented based on the actual problems, radical as it may sound, is not radical at all. For us it's not like that because *it comes from what is originally one...* Unless there is penetration into the basic problem, there will remain such points in question; *when there is penetration into the basic problem, they will cease to exist of themselves.*

It is essential to see that he is not simply *denying* the concrete problems, nor is he speaking from — or of — a utopian ideal. On the contrary, he's standing right in the eye of the storm, or the "basic problem" as he calls it; elsewhere he speaks of "the inner demand of human beings."¹⁰

The same holds true for the second criticism that his postmodern world is limited to the elitist few. For the true basis of such awakened self-awareness is not individual(s) who get awakened: "It is no mere individual self-awareness, but the original self-awareness of all human beings."¹¹ Nothing could be further from elitism. This "original self-awareness of all human beings" directly connects the

これまで取り上げてきた批判にもう一度立ち返ってみますと、たしかに筋は通っています。しかし十分徹底したものと言えるか、しっかりとした基礎のうえに立ったものか、といえそうではないと思います。批判はむしろ「現実主義」を装った、仏教に反する自滅的悲観論（「われわれ大衆にはおそらくそんなことは分からない」という悲観論）と、そういう悟りは実現するにしても「向こうに」、遠い未来にあるという絶望的ユートピア的理想主義との間を揺れ動いているのです。結局のところ、こうした批判こそ、非現実的であり、ユートピア論なのではないでしょうか。

さらに久松は、「より高尚でない形態の国際社会組織あるいは協力の効果をまったく拒否する」ものではありません。この誤った解釈が生まれた背景には次のような事情があります。雑誌『世界』のインタビューで、聞き手が久松の考えの要約として「インターナショナルではだめなんだ」と言っているのですが、この部分をこの批判者が訳したとき「completely useless（まったく役に立たない）」としています。この翻訳が問題で、これはむしろ、「would not work（うまくいかない）」の方がいいと思います。⁶⁾

久松のポストモダン思想を、一方的に「まったく拒否する」思想として還元してしまうならば、久松の意図をまったく見落としてしまうこととなります。簡単な例を挙げますと、「国連ってものは、あれはあかんですよ。（中略）世界の国がよりあつまただけではいけない。むしろ国は解体して、そして一にならなくちゃいけない。」⁶⁾と言う一方で、その少しあとに、「どう〔国を〕寄せるかということになるといろいろありますが、将来、寄せていかざるを得ない……」⁷⁾とも述べているのです。久松を批判する人たちは、この2つの立場がどのように結びつくのかをつかみきれていないと思います。

残念なことに、この「まったく拒否する」思想という誤った解釈からさらに、「現在あるような社会を完全に破壊することをねらう」「転覆」思想であ

"F" (Formless self-awakening) and "A" (All humankind) of "FAS."

What about the criticisms that Hisamatsu's postmodern world is unrealistic, utopian, and thus irrelevant? It certainly can seem that way. When speaking of the postmodern revolution, however, he challenges, "I would like people to change their way of thinking that wonders when it should happen (Laughter). If they want, they can do so in an instant. That is historical time, creative time."⁰²

Looking again at these criticisms: they're certainly reasonable. But have they gone far enough — are they themselves sustainable? No. They vacillate between anti-Buddhist, self-defeating pessimism under the pretense of "realism" on the one hand (we, the masses, probably will not realize such a thing) and hopeless utopianism on the other (such realization is "over there," in the future, if at all). It is the critiques themselves that are, finally, unrealistic and utopian.

Nor is Hisamatsu arguing "the total repudiation of the efficacy of less 'exalted' forms of international social organization and cooperation." This is a serious blunder based, in large part, on a forced mistranslation by the critic, who renders the interviewer's (not Hisamatsu's) spoken *Dame nanda* as "completely useless" when it should read something like "would not work."⁰³

To reduce Hisamatsu's postmodern thought to a one-sided "total repudiation" completely misses his point. To give a simple example, Hisamatsu states negatively: "The United Nations won't do... No mere combination of nations of the world will do. Nations ought

る、というような還元主義的な誤解が生じています。(この批判を提出しているのが福音主義派の神学者であることは興味深い事実です。キリストの教えにしても根本的な「転覆」でなくして何であるというのでしょうか。)

深い宗教性を持つ言葉というものは、ユートピア的、非現実的に響くことがよくあるものです。社会の転覆をねらうものとか危険なものと思われることさえあります。しかし、そうした宗教的な表現は、それらがほんとうに意味していることがらに私たちが入っていくためのきっかけとなりうるのです。ただし、そのためにはこちら側がほんとうに耳を傾け、そこに直入しなければなりません。

久松のポストモダン思想は、他の深い宗教思想と同じように、ある意味で転覆思想であることはたしかです。しかし、いうまでもないことですが、文字どおりに「現在あるような社会を完全に破壊すること」をねらうものではないのです。

また、久松の考えは、「危険」なものでもありません。少なくとも批判者がいう意味で危険ではないと言えます。久松は、「仏教者(や他の人々)にとって必要なことはただひとつ、国家を超えた世界が不可避であることに『覚める』ことだ」とただ受動的に示唆しているのではないのです。(この批判者も「まったく拒否する」という誤った解釈に基づいている。)

具体的な問題や社会的関心はいずれも重要であり、解決への取り組みが必要であります。けれども、久松が私たちに要求するのは、根本的な問題とこれらの特殊な問題がひとつであるような立場に実際に立ち、そこから働き得ることなのです。久松が言うように「…宗教的な世界である、しかもそれがけっして歴史を離れない⁽⁸⁾」ということなのです。また、「道法を捨てずして凡夫の事を現⁽⁹⁾ず」あるいは「真⁽¹⁰⁾實際を動ぜずして諸法を建立する」に対する久松

to be dissolved to return to oneness." Yet he also states positively, a little later in the same discussion: "There are various ways to move towards collecting nations, but in the future such a movement is inevitable."⁶⁴ Hisamatsu's critics have not yet seen what holds these two standpoints together.

Unfortunately, this "total repudiation" mistake has provided much fuel for further literal and reductionistic misreadings. For example, the "subversion" that "seeks the total destruction of society as it exists today." (It is interesting that this criticism comes from an Evangelical theologian. How, I wonder, does he understand Christ's teachings if not as a fundamental overthrowing and "subversion"?)

Statements of profound religiosity often sound utopian and unrealistic, even subversive and dangerous. But such religious expressions can serve as entrances into that of which they speak — provided that we truly listen, and enter therein.

Hisamatsu's postmodern thought, as any deeply religious thought, is subversive in a sense. But it goes without saying that it does not literally seek "the total destruction of society as it exists today."

Hisamatsu's thinking is not "dangerous" either, at least not in the sense intended by his critic. Hisamatsu is not passively suggesting that "the only thing necessary for Buddhists (and others) to do is 'awake' to the inevitability of a supra-national world." (This critic also bases his critique on the "total repudiation" mistake.)

の解釈からするとこれがF A SのS(つまり Suprahistorical History 歴史を超えて歴史を作る) ことなのです。これは、受動的なユートピア的非現実論どころか、永遠の今の最も喫緊の「内面の要求」なのです。

第4点の危険思想という点について、批判者は、「しかし、国家の死が起こらない場合は(実際ほとんど起こりそうにないのだが)、どうなるのか」と言いますが、その場合この方はどこに立って言っているのでしょうか。また他の批判者は、久松が人間の「墮落」した本性を忘れているとして、次のように言っています。「しかし、禅の政治思想は歴史を批判しながらも、歴史の中で働く圧倒的大多数の人間のエゴイズムを前提せざるをえない。」

表面的には、こうした「現実的」な発言はもっとものように見えますが、こうした考え方が実はもっとも「危険」なのだと思います。土俵の外にいて勝てるかどうか、御託を並べているのではなく、まっすぐに戦いの中に飛び込むのでなければなりません。そうするしか道はないのです。久松は飛び込んだのであり、そして私たちにも同じことを求めているのだと確信しています。

久松のポストモダン思想は今後も批判されることでしょう。むしろ批判は当然していかなければなりません。しかし、ポストモダン世界についての久松の生きたビジョンは、いろいろ問題や弱点を抱えてはいますが、現代世界に対する真に根本的な対応と言えるでしょう。ひるがえって日本の禅界を考えて見ますと、そこからそのような対応が出てきているのでしょうか。

久松の批判の対象は、私たちが自分をその一部と考えている客観的な、いわゆる「国家」に対してだけ向けられているではありません。もっと根源的に、国家と一体となっている私たちの「主体的な」欺瞞に向けて攻撃を仕掛けているのです。さらに、そこから自分自身を決定的に解放し、真の自律

All the concrete issues and social concerns are important and must be addressed. Hisamatsu is challenging us, however, to actually stand where both the fundamental problem and these particular issues are one, and work from there. He calls it "...a religious world, yet it never separates from history."⁹⁹ Also see Hisamatsu's interpretation of *The Vimalakirti Sutra's* "Realizing the affairs of an ordinary person [history, world] without abandoning the Dharma-Way."⁹⁹ Elsewhere see how he takes up the Buddhist expression "Creating [all dharmas] without parting from Awakening [lit.: Ultimate Reality] ."¹⁰⁰ This is the "S" of "FAS" (Supra-historical history; transcending history while creating history). Far from being passive, utopian or unrealistic, this is the most pressing "inner demand" of the ever-present moment.

Where is that critic standing when he argues "Yet, what happens (as is most likely) if the death of the nation-state does not occur?" Or another critic, assuming that Hisamatsu has forgotten the "fallen" nature of humans: "Zen political thought, however, cannot but presuppose the egoism of the overwhelming majority of the agents of history, even while criticizing it."¹⁰⁰

On the surface such "realist" statements seem to make sense, but perhaps it is precisely this type of thinking that is most "dangerous." Rather than stand on the sidelines quibbling over whether or not the game can be won — or even played — we must jump into the fray; there's no other way. Hisamatsu has done that; now he is challenging us to do it.

Hisamatsu's postmodern thought will come under criticism for

を自覚し、そこから働きでることを要求しているのです。これは、国家を暴力的に破壊することではありませんし、国家そのものを否定したり、その内部で行動することを否定するものでもありません。

久松のポストモダン思想は「老人の寝言」ではないのです。FASの原則や基本的公案、それに「人類の誓」ともに厳密に一致した、久松の精華と言えます。これをつかむことなしに、はたして基本的公案や「人類の誓」を究極的に自覚できるでしょうか。このポストモダン世界、ポストモダン思想を理解する場合に、それを全体として把握しないならば、まだ理解していないということになるでしょう。

最後になりますが、生きたポストモダン世界は単なる理想あるいは観念でもなければ、単なる現実あるいは実在でもありません。それはつねにここに現成していると同時に、また創られる過程でもあるのです。そのいずれに還元することもできません。それは、現成の完成であって、しかも常に新たにみずから生まれてくる、臨済が言う途中であるような終末論なのです。

これは単なる仏教理論ではありません。生きた、能動的なほんとうの世界であります。それがほんとうに具体化しているかどうか、私たちはつねにもっと徹底的に批判していくと同時に、その具体化を実現するために、全体の内部から、また全体として働いていかなければならないのではないのでしょうか。

(1) 『久松真一著作集』第九巻、法蔵館、1996年、p.372。

(2) 同書、p.335。

(3) 同書、p.376。

(4) 同書、p.341。

(5) 同書、p.390。

some time to come. As it should. His living vision of a postmodern world, however, even with all its problems and weaknesses, is a precious and truly fundamental response to the contemporary world. One need only consider how many other such responses has the Japanese Zen world produced?

It is not just a criticism of the objective, so-called "nation-state" which we consider ourselves a part of, but more fundamentally, a penetrating "subjective" attack on our delusive identification with it. Further, it is a challenge to decisively free ourselves from it, realize true autonomy, *and work from there*. This does not mean violently destroying nation-states; nor does it mean denying them as such — or the possibility of working within them.

Hisamatsu's postmodern thought is not the confused rambling of a senile old man. It is in complete accord with the principles of FAS, the fundamental koan, and the "Vow of Humankind." It is Hisamatsu's fullest and finest fruition. Without understanding it, can we understand the ultimate import of the fundamental koan or the "Vow of Humankind"? Without grasping Hisamatsu's postmodern world / thought as a WHOLE, we fail to see it at all.

Finally, the living postmodern world is neither a mere ideal, nor is it simply real. It's always HERE (realized / actualized) and also in-the-making (realizing / actualizing). It cannot be reduced to one or the other. It is an actualiz-ED-ING eschatology, what Lin-chi [Rinzai] calls "always ON-THE-WAY": it must be actualized, and such actualization continually gives rise to itself anew.

30 夢想家抱石—久松真—のポストモダン世界と西洋における批判—

- (6) 同書、p.346。
- (7) 同書、p.349。
- (8) 同書、第三巻、p.287。
- (9) 同書、第六巻、p.110。
- (10) 同書、第三巻、p.209。

高橋信道訳、著者監修

This is not mere Buddhist theory — it is the living, active and vitally real WORLD. We must continue to critically question whether it has been made concrete or not, just as we must also continually work from within the whole / as the whole to make it so.

.....

1. Christopher Ives, *Zen Awakening and Society*, Macmillan, 1992, p. 78.
2. Ibid., p. 83.
3. Ibid.
4. Steven Antinoff, unpublished dissertation, 1990, p. 230.
5. Brian Daizen Victoria, "From Zen Towards Buddhism" unpublished manuscript.
6. Steven Antinoff, *ibid.*, p. 223.
7. Ibid., p. 231.
8. Bernhard Neuenschwander, "Some Critical Questions About Hisamatsu's Philosophy & F.A.S." *FAS Society Journal*, 1997, p. 94.
9. Brian Victoria, *ibid.*
10. Gishin Tokiwa, "Dr. Shin'ichi Hisamatsu's "Postmodernist Age"" *FAS Society Journal*, 1997, p. 24.
11. Ibid., p. 37.
12. See *ibid.*, p. 27.
13. Steven Antinoff, *ibid.*, p. 223; for a correct translation, see *FAS Society Journal*, Winter 1986-87, p. 6.
14. See Gishin Tokiwa, *ibid.*, p. 31.
15. "Talks on the Vow of Humankind" Part 5, *FAS Society Journal*, 1997, p. 10.
16. "Talks on the Vimalakirti Sutra: Preface" *ibid.*, Winter 1990-91, p. 15.
17. "Talks on the Vow of Humankind" Part 1, *ibid.*, Spring, 1986, p. 2.
18. Steven Antinoff, *ibid.*, p. 235.